

インドヒマラヤ2017遠征報告

上田幸雄（白帆山岳会）

悠久の国・インドへ

とある日、馬目から「遠征行きましょう」と誘いを受けた。始まりは、そんなものだ。誘いを断る理由はない。話は決まったが、もう一人仲間が欲しいという話になり、黒田の名前が上がる。信頼できる仲間としてこの上ない人物である。壁を登るにあたって3名というチームは、安全対策・効率などを考慮すると2名より悪くないだろう。

メンバーは決まったが、目標となる山の選択に頭を悩ませた。9月中旬から30日間で行ける山ということでインドヒマラヤが最有力候補となった。一言でインドヒマラヤといつても、その広さは広大でエリアによって登山シーズンが異なる。ネパールに近くなるほどモンスーンの影響を受け、パキスタンに近くなるほど、その影響は小さくなる傾向にあるらしい。我々が選択したのは、その中間地域であるヒマチャル・プラデイッシュ州のセントラル・ラホール山群。2016年に登山研修所の講師でもある恩田が、この地域を訪れ、魅力を発信していたのも後押しになった。インターネットで20万分の1の地図を購入、

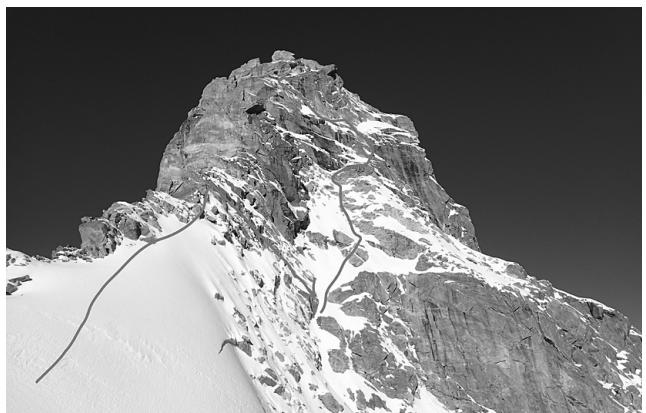


5620m峰（南面）

恩田が撮影した写真、山域の特徴や地域情勢などの情報の提供を受け、グーグルアースをひたすら眺めた。過去の登山隊の記録を漁ったが、我々の情報収集能力の中から得られたものは、1985年のダラムスラ北西壁。イギリス隊のトライした記事の一文が魅力的だった。

「高度差1000mの花こう岩の岩壁、ルートは雪と氷でアイガーの北壁を思わせた。」

ダラムスラ6,446m（別名：ホワイトセール）の初登は1941年。その地理的条件などからか、日本隊を含めて多くの登山者が訪れ、登頂を果たしているものの、北西壁の全容を撮影した写真を得ることが出来なかつた。全くの未知の壁ではないものの、情報の少なさは準備段階において非常に頭を悩ませた。特に、装備の選択と限られた登山日数の中でのタクティクス。



5620m峰（東面）ライン記入

出来る限りの準備をしたはずであったが、結果として準備不足があらわになった部分もあり初めて訪れる山域での登山に対する難しさを思い知った。

6. 海外登山記録

「登山研修」に原稿執筆するにあたって、今後この地域を訪れる登山者にとって有益な情報源となるような内容となるよう配慮するつもりではあるが、言葉足らずの部分があつたり必要ないと思われる内容もあると思われるが、御了承お願いしたい。

1) 遠征結果

目的としていたダラムスラ北西壁は登ることが出来なかつたが、代替の山として推定5,620mの未踏峰(標高差500m・16P)に登頂した。

2) 行動概要

9月13日 成田～デリー

14日 ~IMF泊～ブリーフィング・買い出し IMF泊

15日 ~クル(Kullu)

16日 ~トシュ(Tosh)2,500m～キャラバン 2,700m泊

17日 キャラバン 3,350m泊

18日 キャラバン～BC 4,250m

19日 レスト

20日 偵察・順化・荷揚げ E-Tos氷河 4,430mまで往復

21～24日 惡天 BC停滞

25日 デポ回収

26日 順化登山 アプローチ 4,750m泊

27日 順化登山 5,400m 往復 4,750m泊

28日 順化登山 下山 BC

29日～10月1日 レスト

10月2日 アタック アプローチ 5,100m泊

3日 アタック 頂上往復～5,300m泊

4日 アタック 下山 BC

5～7日 BC

8日 BC～トシュ～マニカラーン(Manikaran)

9日 ~デリー IMF泊

10日 デブリーフィング IMF泊

11～13日 デリー滞在・解散

3) アタックに至るまで

①IMF・デリー市内

IMFは宿泊可能 (1泊朝食付 1,200ルピー)

1ルピー＝2円 ドミトリー・シャワー有
ブリーフィングの為にホテルから移動する手間が省
けて良い。

クライミング施設もあるので、利用できる。

夕食・昼食も状況に応じて利用できる。近郊のレス
トランまで徒歩15～20分

周辺は住宅街・大学キャンパスで歩いて買い物する
のは不便

IMF近くのスーパーで現地の食材を調達した。(高度
順化用食料の一部)

多分、ガス缶購入可能 (450g缶 600ルピー?)

登山終了後に未踏峰の登山料として350ドルを支払う。

(ダラムスラの登山料の半額)

② リエゾン・オフィサー (民間人)

エージェントを経由して、IMFから報酬が支払われ、
装備(テントなど)を貸与されている。非常に紳士的で協力的なリエゾンであった。

③ エージェント (アイベックス)

BCまではガイドが同行。BCにはコック・キッチンボー
イが滞在

食事は米、チャパティー、ダル、サブジー主体

BCテントはレンタルしたが、持参するのがベター(キヤ
ラバンで破損が発覚)

ガス缶 (450g缶・プロパン25%、イソブタン30%、
N-ブタン45%) 18ドル

④ 天候

雨季が終わっていないのか? 9月は不安定な天候が
続いた。午後になると南に開けた谷筋から雲が湧き

始め雨・雪・あられが降った。特に9月22日夕方～24日夕方まで丸2日間雨が降り続き、6,000m以上は30～50cmの積雪と思われた。10月になってからは天候が安定したが、日を増すごとに気温が低下した。

⑤ ダラムスラ周辺の状況

Tos氷河、E-Tos氷河は後退激しくBCとなった台地から100mほど下降して氷河に降り立つ。氷河の状態は安定しているようで、ルートミスさえしなければ、歩きやすい部類だと思う。ただし、氷河に削られた山肌は不安定な堆積層で落石などの危険性が大きい。ダラムスラの取りつきも氷河側面のガレ場の登下降が必至で、雨で緩んだガレ斜面は非常に危険であると判断し、9月中に予定していた高度順化・偵察が不可能となり目標を変えた重大要因である。

周辺の山々は魅力的ではあるが、各ピークに至る枝氷河は懸垂氷河の状態。サイドモレーンも不安定。またセラック・クレバスも多いようで通過には細心の注意と時間を要すると思われる。



⑥ 高度順化

キャラバン出発地点のトシュが2,500m。キャラバンでは2,700m、3,350m、4,250m（BC）と高度を上げていった。最終日は行動時間も長く、高度差も大きいのでBC到着直後は高度障害の影響が大きかった。

私自身、最初のヒマラヤ登山の障害となったのは3,000～4,000m前後の順化の失敗だった。高所登山を始めるにあたって、4,000～5,000mの山の経験値を増やしてから、高度を上げるのが望ましいと思う。

アタックに向けた順化は、ダラムスラ・北西壁の偵察を兼ねて行う予定だったが、上記の理由からBC対岸の5,666mPeakに変更した。4日間の予定で出発したが、結果として5,400mを（5,666mPeakの肩）を往復し、ダラムスラ・北西壁へ至るルート（サイドモレーン・枝氷河上部）の状況を確認した。

また、BC奥・W-Tos氷河（仮称）上流の岩峰（5,620m峰）を確認。ダラムスラ・北西壁へ至るアプローチの状況、天候などから判断して代案として検討することにした。



右端の岩峰が5620m峰

⑦ アタックに向けて

高度順化登山の後、協議を行った結果、5,620m峰をアタックすることを決定した。

理由として

- A) ダラムスラ・北西壁へ至るサイド・モレーン、枝氷河の状態が不安定
- B) 上記に加えて、天候が相変わらず不安定でダラムスラへのアタックに不安がある。
- C) 高度は低いが見た目が格好良く、たぶん未踏峰である。

6. 海外登山記録

リエゾンの登山許可内諾を得たので、アタックの準備を整えて天候が安定するのを待つことになった。

4) アタック

順化登山を終えて、10月に入るとやっと安定しそうな気配が漂ってきたので、5日間の予定で5,620m峰をアタックすることとした。



E-Tos氷河周辺の山々

10月 2 日

BC (7:30) ~ABC 5,100m (14:00)

BCから穏やかな斜面をのんびり登っていく。各自のザックはチンドン屋状態。W-Tos氷河（仮称）末端でアプローチシューズからダブルブーツに履き替え、氷河を歩く。途中から、アンザイレンして5,620m峰基部の氷河上にABC設営。テント設営後、取り付きとコルまでのルートの状態を確認した。

地図と高度順化時に撮影した写真などから察するに、目的のピークは5,500m程度と思われたので標高差は400m程度と考えられ、壁の状態を観察した結果、1ビバーグの準備だけを整え、アタックすることとした。

10月 3 日

ABC (5:10) ~コル (7:50) ~頂上 (16:00) ~BS (19:00?)

ヘッドランプを灯してスタート。コルまでは傾斜

の緩い斜面を6p。コルは広大で快適なテントサイトになるが、如何せんテントは無いので先を急ぐ。見た目通り稜線上を突破するのは不可能と思われ、コルから雪の斜面をどん詰まりまでコンティニアスで登り、ピナクルを利用して右壁の取り付きへと振られながらラッペルを行う。同ルートを登り返すのは困難が予想されるが、意を決してロープを引き抜く。雪壁とアンサウンドな岩を攀じ、2pでルート中で最も傾斜の強いパートの基部へ到達した。3p目は凹状のミックス壁で技術的な核心部。ここを越えて上部の壁の状態を見た馬目から「行けそうだ！」との声が聞こえる。雪壁のガリーから左へトラバースして快適そうな氷のチムニーへ繋げる。チムニーを抜けると傾斜は落ち2pで頂上直下のコルに到達。頂上岩峰の一角に達したが、馬目が最高点への拘りをみせる。アイゼンを脱いで正面のスラブに突入。ノープロテクションでじりじりと高みを目指すが、ビレイする私の方が緊張する。4mほど登りクラックに達する直前にフォール。上手く体制を整えていたので、怪我もない。3人顔を見合わせ、再度のトライ。ラインを変えてクラックに到達、プロテクションをセットして胸を撫でおろす。岩峰の反対側を覗き込んだ馬目から歓喜の声。姿は見えなくなったがロープはするすると伸び、最高点に達した。W-Tos氷河周辺に此処より高い峰は無い。いい加減な地図



のおかげで嬉しい誤算だった。

見渡す限り山また山。山の同定は出来ないが、無限の可能性が広がっていることを感じた。高所登山は高きが故に困難な部分も大きいが、未知のものに對峙する感覺は高度の困難性を凌駕するに違いない。故に人は未踏峰を目指すのだろう。

太陽はすでに傾き、山脈の彼方に隠れてしまうのは時間の問題だ。ビバーグギアをデポしてきた我々に頂上で感慨深く感傷に浸っている猶予はない。同ルート近辺をピトン・ショック・トライカムを駆使してラッペルを繰り返す。3pもラッペルするとヘッドランプの必要な暗さとなり、ようやくデポ地点に到達。ここでビバーグ出来なくもないが、可能ならばコルまで戻りたい。しかし、さらに1pラッペルした時点で、「これ以上下るのは、止めておこう」と馬目が問いかける。ヘッドランプの灯りで登りでラッペルしたパートを登り返すのは難しいし、未知のラインを探るのも大きなリスクを背負うことになる。幸い、突出した岩の基部の傾斜が緩やかなのでテラスに切って、ビバーグサイトとした。着の身着のままだったが、ガスと食料があるだけで幸せだと感じていたのは食事が終わるまでの短い時間だけだった。シートを被って腰掛けたら明るくなるまで、ただひたすら我慢する。そんな時間もヒマラヤならではのアクセントかもしれない。



10月4日

BS(7:00)～ABC(10:00～11:50)～BC(14:00)

待望の朝日が昇ってきた。

懸案のコルへの登り返しは、別ラインから難なく突破しコルへ到達。まだ安心は出来ないが、太陽に温められただけで癒される。コルからの下降もアンサウンドな岩でのアンカー構築を慎重に行い、SLCDを除いた全てのギアが無くなるころに、氷河に降り立つ。テントを撤収して、BCへ下降を始めるが、気温の上昇した氷河歩行は気が抜けない。入山日に設置したルート旗・ケルンを目印に氷河末端に到達した。

あとは気ままにBCを目指すのみ。途中にあるボルダーが気になったが・・・

結果として10月に入ると天候が安定し、好天に恵まれたものの、限られた時間と条件の中で、精一杯の成果であったと思う。当初の目的の壁に取り付くことすら出来なかったことは正直、悔しいし引きずっている。しかし、決めたのは自分自身であり仲間との協議の結果である。生きていれば、また楽しい登山ができるに違いないし、何らかの事情で登れなくなっていても、山は違った楽しみを与えてくれるだろう。

以上、敬称略



ダラムスラ（中央）とパプスラ（左）

6. 海外登山記録

メンバー

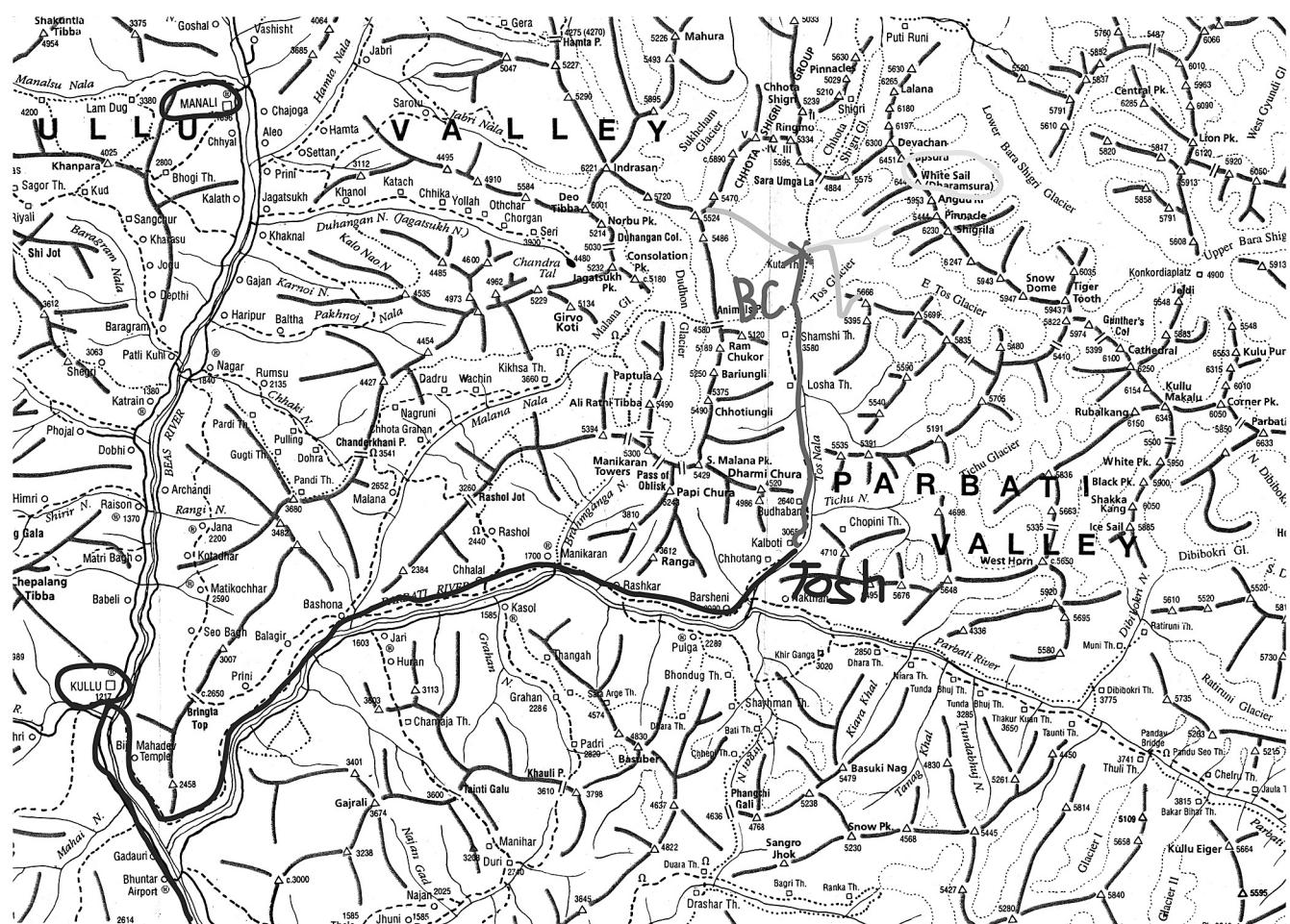
馬目 弘仁 (48)

黒田 誠 (44)

上田 幸雄 (50)

謝辞

株式会社ゴールドワインさま、公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会さまをはじめ、多くの関係者の方々にサポートしていただき、無事に遠征を終えることが出来ました。紙面をお借りして、厚く御礼申し上げます。



概念図（ルート記入）